

| | |
|--------------------|-------------------------------|
| Title | 戦争認識のすれ違い：日本人学生とフィリピン人学生 |
| Author | 早瀬, 晋三 |
| Citation | 大阪市立大学大学教育. 9 卷 1 号, p.25-32. |
| Issue Date | 2011-09 |
| ISSN | 1349-2152 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | Publisher |
| Publisher | 大阪市立大学大学教育研究センター |
| Description | |
| DOI | 10.24544/ocu.20171218-171 |

Placed on: Osaka City University

報告

戦争認識のすれ違い 日本人学生とフィリピン人学生

A Gap of War Awareness between Japanese Students and Filipino Students

早瀬 晋三
大阪市立大学大学院文学研究科

HAYASE, Shinzo
Osaka City University, Graduate School of Literature and Human Sciences

キーワード: 戦争認識、東南アジア、フィリピン、ポスト戦後、共通歴史教科書、学生
Keywords: war awareness, Southeast Asia, Philippines, post-postwar, common history textbook, students

はじめに

本稿の目的は、大阪市立大学全学共通科目「戦争と人間」で使用している教科書（早瀬，2007）の英訳版（Hayase, 2010）を読んだフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学学部生51人の感想文から、アジア太平洋戦争にかんする日本人学生との認識の違いを明らかにすることにある。

アテネオ・デ・マニラ大学は、イエズス会経営の名門私立大学である。1581年にフィリピン諸島での布教活動をはじめたイエズス会は、一時期（1768～1859年）追放されたものの、復帰した1859年から学校を運営し、1902年から私立大学を運営している。現在、初等、中等、高等教育、大学院まであり、大学・大学院では人文・社会科学を中心に、自然科学との学際的領域まで幅広い教育をおこなっている（アテネオ・デ・マニラ大学ホームページ）。

感想文を寄せた学生は、全4学部（School of Humanities, School of Social Sciences, School of Science and Engineering, John Gokongwei School of Management）のひとつである社会科学学部、歴史学科（Department of History）提供の全学3年生以上向け科目HI166「フィリピン史」の受講生である。社会科学学部には7学科、4プログラムがあり、日本学プログラムも含まれている。受講生は全学部の学生で、歴史学を専門とす

る者は少数で、多くは3年生である。感想文は、6月からはじめた前期の終わり近くの8月末から9月初めにかけて送られてきた。担当教員のタン講師Ma. Felisa S. Tanには、フィリピンにおける憲兵隊にかんする著作がある（Syjuco, 1988）。

フィリピンでは6歳から通常6年間の初等義務教育の後、義務教育ではない4年間の中等教育があり、大学には日本より2年早く16歳で入学できる。アテネオ・デ・マニラ大学のような裕福な家庭の子弟が多い3年生は、20歳未満が多い。1年生が大半を占める大阪市立大学の全学共通科目の受講生と、年齢的には変わらない。

感想文は、reaction paperという表題で書かれているものが多い。電子メールの添付ファイルで送られてきており、メール本文で自己紹介し、本の礼を述べ、感想のまとめを簡略に述べている。社会的常識を、十分にわきまえている学生たちである。感想文の多くは1000語前後だが、その半分以下のものも倍以上のものもいくつかある。授業とは直接関係なく読んでいるため、授業とのかかわりを書いた者はいなかった。記述は自由であるが、担当教員の助言にしたがって、最後に約半数が推薦できるかどうかについて書いている。以下、「推薦できるか?」「好意的に読まれたか?」「好意的に読まれた理由」「批判点」「意見その他」に分けて、考察を試みた。

本題に入る前に、大阪市立大学全学共通科目「戦争

と人間」のシラバスと、受講前におこなったアンケート結果および受講後に学生が書いた感想について紹介する。

1 .大阪市立大学全学共通科目「戦争と人間」

拙著『戦争の記憶を歩く 東南アジアのいま』は、大阪市立大学全学共通科目「戦争と人間」の教科書として書いた。英語版は、その翻訳である。2003～05年に東南アジア6ヶ国の戦争遺跡、博物館などをめぐり、日本人の東南アジア史研究者として、東南アジアの歴史と文化のなかでそれぞれの国の対日観を、とくに若者に伝えることを目的とした。当時2001～06年に小泉純一郎首相が6年連続して靖国神社に参拝し、内外で問題となっていた。出版までのいきさつについては、(早瀬, 2007.3.9) (早瀬, 2008) を参照。

(1) シラバス

科目の主題と目標

「ポスト戦後時代の東南アジア」。首相の靖国神社参拝問題などで「戦後が終わらない」日本にたいして、ほかの東・東南アジアでは「ポスト戦後」の動きが顕著になってきている。「ポスト戦後」状況は戦争を忘却し、「戦前」に直結する危険性を孕んでいる。だとすると、戦争責任や戦後責任を無縁と考えている日本の若い世代には、現在を「戦前」にしないための責任が生じてきている、とすることができる。いま、日本の若い世代は、アジアにおける対日戦争の歴史とその「記憶」の伝えられ方に目を向け、今後の交流を考えていく必要があるだろう。

授業内容・授業計画

本講義では、今日の東南アジア各国・地域の博物館での展示や碑文、教科書で、日本との戦争がどのように語られ、今日のそれぞれの社会に影響を与えているかを考える。また、戦中の日本人が東南アジアの歴史や文化にたいして無知であったことから、現地の社会と摩擦を起こしたことを理解し、「ポスト戦後」時代に必要な歴史・文化的知識について考える。

マスコミなどでは、おもに中国や韓国の反日報道がとりあげられるが、日本の「大東亜共栄圏」構想に巻

き込まれた東南アジアでも、新たな動きがおこっている。戦後の東南アジアでは、日本との経済関係が発展したが、近年の中国の経済成長とともに中国との関係が緊密になってきている。社会に出て接する機会の多い東南アジアの今日の対日観について学び、今後の交流を考える。

1. 授業の目的、概略
2. 「ポスト戦後」責任とは？
3. シンガポール - 多民族国家形成のための教訓
4. マレーシア - つぎの世代へ繋ぐ記憶と忘却；インドネシア - フロンティア史のなかの虐殺
5. タイ - 観光資源としての戦争遺跡
6. タイ - 日本人の慰霊活動
7. 討論 - 日本人の慰霊活動
8. ミャンマー（ビルマ） - 語られない日本の占領
9. フィリピン - アメリカと日本のはざままで
10. フィリピン - フィリピン人の対日観
11. 韓国と中国の対日観
12. 日本の戦争博物館
13. 討論 - 「ポスト戦後」責任とは？
14. 総括

(2) 受講前のアンケート

2008年度から受講生の問題意識を高めるために、最初の授業で同じアンケートを実施している。アンケート結果の表からわかることは、戦争についての情報源はおもに聞き流しのテレビで、アメリカ、中国、イギリス、ソ連と戦い、東南アジアが戦場となった印象があまりないことである。戦争体験を聞く機会のあった者が大半で、半数以上は学校などの催しで聞き、祖父母から聞いた者もそれぞれ3人に1人いる。3年間でそれほど大きな変化はないが、首相の靖国神社参拝に賛成する者が、2008年度35（24.8%）、2009年度32（27.8%）から2010年度41（30.8%）に増加し、反対する者が2008年度37（26.2%）、2009年度32（27.8%）から2010年度24（18.0%）に減少している。小泉首相の靖国神社参拝が問題になったとき、受講生の多くが小学生高学年から中学生で、低年齢化してきて、具体的なことがわからなくなってきたためかもしれない。

表：2008 - 10年度全学共通科目「戦争と人間」第1回目授業アンケート結果

| | 2010年度合計 | | 2009年度合計 | | 2008年度合計 | |
|--|----------|-------|----------|-------|----------|-------|
| (1) あなたは、首相の靖国神社参拝に賛成ですか、反対ですか。もっとも近い回答の()内に を付けてください。 | | | | | | |
| 賛成 | 41 | 30.8% | 32 | 27.8% | 35 | 24.8% |
| 反対 | 24 | 18.0% | 32 | 27.8% | 37 | 26.2% |
| どちらでもない | 43 | 32.3% | 19 | 16.5% | 46 | 32.6% |
| わからない | 18 | 13.5% | 23 | 20.0% | 19 | 13.5% |
| その他 | 5 | 3.8% | 9 | 7.8% | 4 | 2.8% |
| 無記入 | 2 | 1.5% | 0 | | 0 | |
| 合計 | 133 | | 115 | | 141 | |
| (2) あなたは、上記の質問にたいして十分な知識をもっていますか。もっとも近い回答の()内に を付けてください。 | | | | | | |
| 十分な知識をもっている | 4 | 3.0% | 1 | 0.9% | 0 | |
| 多少の知識をもっている | 64 | 48.1% | 43 | 37.4% | 63 | 44.7% |
| あまりもっていない | 55 | 41.4% | 63 | 54.8% | 70 | 49.6% |
| まったくもっていない | 9 | 6.8% | 7 | 6.1% | 8 | 5.7% |
| その他 | 1 | 0.8% | 1 | 0.9% | 0 | |
| 無記入 | 0 | | 0 | | 0 | |
| 合計 | 133 | | 115 | | 141 | |
| (3) その知識の情報源は、なんですか。もっとも多く得ていると思うものひとつだけ、()内に を付けてください。 | | | | | | |
| インターネット(携帯電話) | 3 | 2.3% | 0 | | 0 | |
| インターネット(パソコン) | 3 | 2.3% | 7 | 6.1% | 14 | 9.9% |
| 雑誌 | 0 | | 0 | | 0 | |
| 書籍 | 10 | 7.5% | 7 | 6.1% | 7 | 5.0% |
| 新聞 | 15 | 11.3% | 9 | 7.8% | 13 | 9.2% |
| テレビ | 75 | 56.4% | 65 | 56.5% | 63 | 44.7% |
| ラジオ | 0 | | 0 | | 0 | |
| 兄弟姉妹 | 0 | | 0 | | 1 | 0.7% |
| 祖父母 | 3 | 2.3% | 0 | | 1 | 0.7% |
| 父親 | 2 | 1.5% | 2 | 1.7% | 4 | 2.8% |
| 母親 | 5 | 3.8% | 7 | 6.1% | 0 | |
| 友人・知人 | 4 | 3.0% | 2 | 1.7% | 0 | |
| その他 | 4 | 3.0% | 3 | 2.6% | 3 | 2.1% |
| 複数記入 | 6 | 4.5% | 12 | 10.4% | 35 | 24.8% |
| 無記入 | 3 | 3.0% | 1 | 0.9% | 0 | |
| 合計 | 133 | | 115 | | 141 | |
| (4) アジア太平洋戦争で日本が戦ったイメージが強い国・地域を順番に選んで、()内に1, 2, 3...と番号を記入してください。戦っていないと思う国・地域は空欄のままにしてください。[3番までに入ったものを集計] | | | | | | |
| アメリカ | 124 | 93.2% | 109 | 94.8% | 125 | 88.7% |
| イギリス | 56 | 42.1% | 50 | 43.5% | 54 | 38.3% |
| インド | 1 | 0.8% | 0 | | 1 | 0.7% |
| インドネシア | 1 | 0.8% | 3 | 2.6% | 5 | 3.5% |
| オーストラリア | 0 | | 0 | | 1 | 0.7% |
| オランダ | 4 | 3.0% | 3 | 2.6% | 5 | 3.5% |
| カンボジア | 0 | | 1 | 0.9% | 0 | |
| サイパン | 10 | 7.5% | 3 | 2.6% | 13 | 9.2% |
| シンガポール | 1 | 0.8% | 0 | | 1 | 0.7% |
| ソ連 | 50 | 37.6% | 31 | 27.0% | 51 | 36.2% |
| タイ | 0 | | 2 | 1.7% | 2 | 1.4% |
| 中国 | 80 | 60.2% | 63 | 54.8% | 67 | 47.5% |
| 朝鮮 | 12 | 9.0% | 16 | 13.9% | 9 | 6.4% |
| ドイツ | 3 | 2.3% | 2 | 1.7% | 4 | 2.8% |
| ビルマ | 3 | 2.3% | 4 | 3.5% | 1 | 0.7% |
| フィリピン | 7 | 5.3% | 3 | 2.6% | 5 | 3.5% |
| フランス | 7 | 5.3% | 8 | 7.0% | 13 | 9.2% |
| ベトナム | 3 | 2.3% | 2 | 1.7% | 2 | 1.4% |
| マレーシア | 0 | | 1 | 0.9% | 2 | 1.4% |
| 満洲 | 11 | 8.3% | 18 | 15.7% | 17 | 12.1% |
| モンゴル | 0 | | 0 | | 0 | |
| ラオス | 0 | | 0 | | 0 | |
| その他 | 0 | | 1 | 0.9% | 0 | |
| 無記入 | 1 | 0.8% | 0 | | 25 | 17.7% |
| 無効 | 2 | 1.5% | 2 | 1.7% | 17 | 12.1% |
| 合計 | 133 | | 115 | | 141 | |
| (5) 戦争体験について、直接聞いたことがありますか。()内に を付けてください。 | | | | | | |
| ある | 115 | 86.5% | 97 | 84.3% | 115 | 81.6% |
| ない | 18 | 13.5% | 18 | 15.7% | 24 | 17.0% |
| 無記入 | 0 | | 0 | | 2 | 1.4% |
| 合計 | 133 | | 115 | | 141 | |
| (6) (5)で「ある」と答えた人だけ、答えてください。それは誰からですか。()内に を付けてください(複数回答可)。 | | | | | | |
| 祖父 | 48 | 36.1% | 28 | 24.3% | 47 | 33.3% |
| 祖母 | 39 | 29.3% | 28 | 24.3% | 50 | 35.5% |
| 親戚の人 | 5 | 3.8% | 4 | 3.5% | 3 | 2.1% |
| 近所の人 | 3 | 2.3% | 0 | | 3 | 2.1% |
| 学校の行事 | 72 | 54.1% | 65 | 56.5% | 69 | 48.9% |
| 体験を聞く会などの催し | 30 | 22.6% | 13 | 11.3% | 21 | 14.9% |
| その他 | 2 | 1.5% | 3 | 2.6% | 3 | 2.1% |

(3) 受講後の感想

2010年度の最後の授業で、教科書にたいする感想を求めた。103人の自由記述から共通したものを拾い、つぎのようにまとめた。103人のうち約8割が、入学直後の1年生である。自由記述であるため、それぞれとくに印象に残ったものを書いていることになる。

| | |
|----------------------------|------------|
| 「歴史と現代を結びつけ、自分の問題として考える」 | 80 (77.7%) |
| 「東南アジアについて知らなかった」 | 48 (46.6%) |
| 「ほかの国の対日観を理解する広い視野が必要」 | 41 (39.8%) |
| 「戦争にかんする歴史教育の不備、とくに被害中心」 | 32 (31.1%) |
| 「戦争にかんして無知・無関心だった」 | 31 (30.1%) |
| 「反日の原因がわかった」 | 31 (30.1%) |
| 「賠償など戦後処理が不十分」 | 30 (29.1%) |
| 「日本人がほかの国の歴史や文化を軽視・否定」 | 30 (29.1%) |
| 「戦争にかんして欧米中韓などに偏った見方をしていた」 | 23 (22.3%) |
| 「正しい知識が必要」 | 19 (18.4%) |
| 「日本人は加害者でもある」 | 13 (12.6%) |
| 「日本人の慰霊活動は問題」 | 11 (10.7%) |
| 「フィールドワーク、現地を見ることの重要性」 | 11 (10.7%) |
| 「戦争のことを知ることが抑止力になる」 | 9 (8.7%) |

など

東南アジアでの戦争どころか、それぞれの国や地域の歴史や文化、位置さえわからない者が多いため、まったく知らないことを前提に講義をする必要があった。日本側の視点に立った原爆や空襲などの被害中心の学校教育では、なぜ中国や韓国などの人びとが日本の戦後処理を充分であると感じず、反日になるのかがわからなかった。授業をとおして強調した「互いの歴史や文化を尊重することが、これからの多文化共生社会にとって重要」であることが理解できるようになり、大半の者が「歴史と現代を結びつけ、自分の問題として考える」ようになったことは、授業の目的が達成されたことを示している。

2. アテネオ・デ・マニラ大学学生の感想

(1) 推薦できるか？

自由記述であるため、書いていないものや強調していないものもある。全体の記述から、書いていない者でも「推薦できる」と考えている者もあり、また強調していないが「推薦できる」とだけ書いている者のなかには「大いに推薦できる」と考えていることが明らかなる者もいる。したがって、「大いに推薦できる」13 (25.5%)、「推薦できる」13 (25.5%)は、「すくなくとも」である。強調して「推薦できる」とした者は、早く提出した者が多く、書きやすかったことが想像できる。

(2) 好意的に読まれたか？

感想文の全体から判断して、「非常に好意的」「概ね好意的」「好意的だが批判も」「批判的だが意義も認める」に分類した。批判的かつ意義を認めないものはなかった。「非常に好意的」は18 (35.3%)、「概ね好意的」20 (39.2%)で、それぞれ「大いに推薦できる」「推薦できる」に対応している。「好意的だが批判も」は8 (15.7%)で、読みづらかった箇所があったことを原因としている者が多い。「批判的だが意義も認める」5 (9.8%)は、内容的に偏りがあり、歴史観に違いがあるために受け入れにくかった者が多いが、日本人読者向けのものとしては評価している。

(3) 好意的に読まれた理由

まず、「ほかの東南アジアのことがわかった」と書いた者が31 (60.8%)で、フィリピンでもナショナル・ヒストリー中心の教育で、東南アジア諸国連合 (ASEAN) の連帯が唱えられていても、近隣諸国の歴史や文化について、いかに知らないかが如実になった。自由記述で60%を超え、関連するものとして「フィリピンと比較できた」10 (19.6%)などを加えると、フィリピンの記述以外は、初めて知ることだったことがわかる。そのことは、「興味を持った」21 (41.2%)、「新しさに目を見開かされた」20 (39.2%)にもあらわれている。

つぎに、「ともに旅している臨場感」があったとす

る者が18 (35.3%)で、「今まで読んだ歴史教科書とは違う」8 (15.7%)と感じ、「読みやすく、わかりやすい」8 (15.7%)と評価している。わかりやすかった理由として、「章の最初に年表がある」9 (17.6%)や「章の終わりにまとめがある」5 (9.8%)ことをあげており、馴染みのない国の歴史の理解を助けたことがわかる。

また、「公平に書いている」と評価した者が11 (21.6%)いた。戦争記念碑や博物館の展示説明文など、地元の声をそのまま引用したのがよかったと、「戦争記念碑を素材にしたこと」をあげた者が11 (21.6%)いた。

(4) 批判点

「テーマから外れた記述、冗舌」12 (23.5%)、「まとまりがない」8 (15.7%)、「話が脈絡もなく飛ぶ」6 (11.8%)で、戦争にかんする話だけでなく、それぞれの国の歴史や文化を説明したことが、読者の集中力を失わせたようだ。日本人学生は、高校までに東南アジアの歴史や文化を学ぶことがほとんどなく、フィリピンとインドネシアの区別がつかなくなったり(どちらの国にイスラーム教徒が多いのか、キリスト教徒が多いのかなど)、ビルマがミャンマー(1989年に改称)の旧国名だということを知らなかったりする者がいる。講義中、ある国について話しているときに、比較として別の国の話をすると必ず混同する者がいるため、ひとつの国の話しかしないことにしている。フィリピン人学生も、フィリピン以外の国の歴史や文化について知らないため、話のつながりがよくわからなかったようだ。「東南アジアの予備知識がないのでわかりにくい」が6 (11.8%)あった。また、興味をもってもらうために書いたサイド・ストーリーが、逆に混乱のもとになった。

「写真などが無い」8 (15.7%)はもっともで、日本人学生にわかりやすいと好評だった日本語版で掲載した写真など図53点、各章の扉裏の地図などはすべて、出版経費節約などのために英語版では省いた。そのかわりに、日本語版にはない11頁の索引を加えた。とくに「第4章タイが長すぎる」と感じた5 (9.8%)は、キリスト教の影響を受けた地名、人名の多いフィリピ

ンにたいして、タイでは上座仏教に因んだ地名、人名が多く、馴染みにくかったためもあるだろう。

「虐殺など具体的なことが書かれていない」12 (23.5%)は、もっとも深刻に捉えなければならないことのひとつである。本書では、加害者としての日本兵の実態についてほとんど知らない日本人学生が、拒否反応をおこさないように、具体的な記述を控え、記念碑や博物館の説明文で淡々と述べることにした。それでも日本人学生のなかには「自虐史観」ととらえてうんざりし、「先生は日本が嫌いですか?」と書いてくる者がいる。フィリピン人学生が、戦争のこととなると、もっと具体的なことを小さいころから聞いていることは、「(5)意見その他」で詳しく述べる。

「歴史というより観光ガイド」8 (15.7%)は、好意的に読まれた理由としてあげられた「ともに旅している臨場感」18の裏返して、大学の授業の教科書としてはふさわしくないととった者がいた。アテネオ・デ・マニラ大学の学生は3年生以上であるため、すでに専門科目を多くとっており、学術的なものを期待した者には物足りなかったようだ。

(5) 意見その他

フィリピン人学生が、日本占領期について具体的に学ぶ機会があったことは、「学校教育で戦争のことを学んだ」8 (15.7%)、「博物館や記念碑、映画などで学んだ」3 (5.9%)、「祖父母などから戦争体験を聞いた」6 (11.8%)にあらわれており、それに比べて日本人が戦争について知らないことは、「日本人にもっと戦争教育を」9 (17.6%)にあらわれている。

日本人学生が、戦争について知らないことについて、具体的な経験を書いた者が2人いた。ひとり、語学研修のために来ていた日本人学生の無知にあきれかえった。その日本人学生は、カトリックの修道会、神言会を母体とする大学から来ており、アテネオ・デ・マニラ大学とは交換留学がおこなわれている。もうひとは、大学と高校と2度経験した。

最近、ひじょうに幸運なことに、日本の大学生を案内して、歴史の講義を参観する機会があった。彼らがフィリピンに来たのは、1ヶ月間の語学研

修のためで、フィリピン史の講義は、そのコースの一部であった。わたしはバディー（buddy、滞在中の「きょうだい」）として、以前講義を受けたことのあるパトリシア・ダクダオ先生（Patricia Dacudao）の講義に参加した。先生は、まず日本人学生に「第二次世界大戦について知っていることはなんですか？」と訊ねた。日本人学生のなかでもっともよく英語を話すことができるユミは、あまりよく知らない、戦争について知っていることは、アメリカが日本に原爆をおとしたが、日本が勝ったことだけだ、と答えた。わたしは、ひどくショックを受けた。子どものころから、わたしは日本人を水責めの拷問、虐殺、強姦をするひじょうに残酷な人たちだと教えられて成長したのに、日本人学生のバディーはフィリピンで日本人がしたことについて、なにもまったく知らないことに違和感を感じた。

以前日本人のクラスメイトがいて、マニラの日本占領について学んだとき、その日本人学生が恐れおののいていたので、学校で習ったかどうかを訊ねたところ、そんなに詳しく習っていない、と答えた。また、日本人修道女が高校を訪ねて来たとき、日本の教科書では戦争にかんする情報が少ないので、フィリピンの教科書を持ち帰りたいと言った。ここフィリピンでは、自由や独立のために闘った歴史を中心に革命や戦争について学ぶのに、日本人学生はほんの少しの事実と年号以外、戦争についてほとんどなにも知らないことがわかった。

「祖父母から戦争体験の話聞いた」ひとは、本に拷問、強姦、虐殺のような具体的なことが書かれていないことを問題とし、つぎのように書いてきた。また、別の学生は、不快感をあらわにして、戦争にかんする話が、子から孫へと受けつがれている様子を伝えている。

わたしの母方の祖父母は2人とも、戦前サンバレス州の裕福な家庭に属していた。祖父の父は町

長だった。彼は、ゲリラのシンパで戦争のための武器や食糧を提供していた。なぜだかわからないが、彼がゲリラに呼びだされて、待ちあわせ場所に行ったところ、日本の警察がいて逮捕された。ゲリラのひとりが日本人のいいなりになって、彼がゲリラのシンパだと告げたのだった。彼は拷問され、処刑された。また、彼と家族の全財産は日本人に没収された。いっぽう、祖母の家族は、街のすべての薬屋を所有していた。かの女の父は街に質屋と地方にかなりの土地を所有していた。日本人がやってきて、すべての土地を強奪し、所有物をすべて破壊し、家業のすべてを奪った。また、多くの宝石類が略奪された。祖母は、よくわたしにつぎのように話してくれた。日本人が来るまで、多くの貴重な装身具が、特注でつくられた。金やプラチナに、ダイヤモンド、ルビー、その他の宝石をちりばめ、持ち主の名前を冠した。日本人が家にやってきて、財産の権利、宝石類をすべて奪い、家を焼いた。祖母は最初の息子を妊娠中だったが、あちこち転々とした。幸い、伯父は障害もなく生まれた。祖父母の両家族とも、ほとんどの財産を失い、とくに裕福な家族から、普通の裕福な家族になってしまった。もちろん、彼らの世代は、財産は失ったけれども、生き残ったことに感謝している。しかし、わたしたちの世代、つまりわたしのきょうだい、いとこ、わたしはこの話を聞いて、富を失ったことにたいして日本人を責めずにはいられない。もし、日本人がフィリピンに来なければ、もっと多くの財産を相続し、それで人生を楽しむことができたはずだ。わたしたちは、多くの財貨を求めることが自分勝手なことだとよくわかっている。でも、とくにいま困難なときに、どうしようもなくなる。日本人さえ来なければ、たくさんの金があったというおとぎ話のような話が、とても信じられない。わたしたちの家族の経験は、ほかの家族に比べればまだずっとましだとわかっている。あの時代に生きたわたしたちの祖父母たちには、感謝している。もし、生き延びていなければ、わたしたちは生をうけていないのだから。基本的に、わたしたちの日本人にたいする

憤りは、それほど大きなものではない。持つことができたはずの夢が、わたしたちの手からこぼれ落ちたにすぎないのだ。

正直言って、この種の議論をすると、ひじょうに不愉快になる。東南アジアのあちこちでおこった憂鬱なことを読むと、感情的になってしまう。日本占領については、悪い印象しかない。小さいころから、過去におこった話をたくさん聞いてきた。親しくしている親戚から、人間として扱われなかったことを聞いて、そのことを忘れないことが重要なのだと思った。悲しいことに、あなたの本は、あらゆる意味で、歴史と言え、わたしの気持ちを暗くすることを再確認させてしまった。

ここフィリピンに、なぜ戦争記念碑がそれほどないのかわかった。この国にはもっと多くの記念碑が必要かもしれないが、人びとは記念碑にたいして悪い感情をもっている。マニラのイントラムロス（城郭都市）に行けば、建物の入口に説明書きがある。その多くに、この建物は第二次世界大戦中に破壊されたと書かれていて、苦痛がよみがえってくる。東南アジア各地でおこったこのような事実にたいして、向きあわねばならない。わたしは、あなたの本にかんして、また戦争一般にかんして、思うままに書きたい。

わたしの祖父母は、フィリピンにおける日本の占領の影響を直接受けた。わたしが1940年代におこったことを訊くと、いつも興奮し、話を止めることができなかった。わたしは戦争の時代を生き抜いた人びとから多くの感動的な話を聞いた。その多くの人びとが、いまはもう亡くなっていて、子どもたちに聞かせることができなくなっている。彼らは、その記憶を抑えなければならなかった。さもなければ、苦しい体験を克服し、国を再建することができなかったからだ。わたしに父は、父の父の話をしてくれた。夜中に起きると、ベッドから飛び起き、「奴らが来る。隠れる！」と叫び、妻と子どもの顔を見つめた、と。

「本を読んで日本人に嫌悪感」をいただいた者は3

(5.9%)と、それほど多くなかったが、あらためて日本人に悪感情を抱いた者がいたことは確かだ。しかし、歴史事実は事実として、それを日本人の研究者から知ったことは、長い目で見ればプラスになると考えている。過去を過去として冷静に受けとめ、未来を切り開いていこうと、つぎのように書いてきた者がいた。

フィリピンに暗い日々を思い出させる記念碑は、もうこれ以上必要ないと思う。わたしたちに必要なのは、前へ進み、戦争で失ったものを復活させる具体的な行動をすることだ。いまでもフィリピンは、戦争の廃墟のなかでのたうち回っている。想像してみる！ 60年たっても、この国はかつて謳歌した繁栄を取り戻す方法を見つけていない。戦争中に家を失った何百万の人びとは、いまだ自立していない。フィリピン政府は、依然として不法居住者を追いかけて回している。フィリピン国有鉄道は、軽便鉄道、とメトロ鉄道を除いて、いまだ荒廃したままだ。わたしはどこかに行くために、鉄道をつかった者に会ったことがない。フィリピン政府は、鉄道復活のための資金を準備すべきだ。わたしの夢は、鉄道をつかって北部ルソンや南部ルソンに行くことだ。将来の夢だけで、終わらせたくない。

「赦し忘れたいが、そんなに単純じゃない」と書いた者が4(7.8%)おり、ほかに「許せない」と感じている者がいることが文章の端々から伝わってくる。「過去は過去」として、あまり気にしていない者もいる。たとえば、つぎのように書いた者がいた。

わたしは祖父母から戦争の話を聞き、興味をもったが、現実味をもって気持ちを揺さぶるほどのものではなかった。わたしは平和な時代に生まれ、困難に遭うこともあるが、祖父母が体験したような経験はしたことがない。将来過ちを犯さないために、過去の知識を生かすということはわかるが、その必要性を感じることは難しい。

わたしは大学生で、まさにあなたが読者対象としているポスト戦後世代に属する。わたしが、わ

たしたちが注意を払うべきなのはもっと現代の問題だと言うのは、失礼にあたらなと思う。

むすびにかえて

日本人学生が加害者としての日本人について知らないのにたいして、フィリピン人学生は学校、家庭、博物館、記念碑、路傍の歴史説明板などで、戦争中に日本人から具体的に危害を加えられたことを教えられて育っている。日本で8月6日（広島平和記念日）、9日（長崎原爆の日）、15日（終戦の日）、6月23日（沖縄慰霊の日）などが毎年大々的に報道されるのにたいして、フィリピンでは4月9日（1942年パタアン半島陥落）、10月20日（1944年アメリカ軍レイテ島上陸）などが記念日として毎年再記憶される。ともにナショナル・ヒストリーとして、自国中心に語られる。

ヨーロッパでは、ヨーロッパ連合（EU）が1993年に成立し、その後拡大していったのにもない共通歴史教科書の試みが続けられている。日本、中国、韓国でも、歴史認識問題の解決のために同様の試みがはじめられている。しかし、東南アジアを含む東アジア共同体が論議されながら、共通歴史教科書の話はまったく聞かれない。ASEANの連帯は強まっているようにみえるが、フィリピン人学生は近隣諸国の歴史や文化についての知識がない。ほかの東南アジアの国ぐにのんびりとも、同じように近隣諸国の歴史や文化についてあまり知らない。

そのようななかで、アジア太平洋戦争について、体験者が少なくなってきた現在、単純化し画一化して、それぞれのナショナル・ヒストリーのなかで語られるようになる可能性がある。そのことは東・東南アジアのなかで共通の「敵」としての日本がイメージされやすくなることを意味し、日本が孤立する危険性がある。東南アジアでも日本の経済的優位が崩れていくなか、今後の交流の大きな障害として戦争認識のすれ違いがある。いま、日本人は、日本がつくった戦争空間とし

ての「大東亜共栄圏」と重なる東・東南アジアのなかで、それぞれの国や地域の歴史や文化を理解することが必要になってきている。そのためには、加害者としての日本を十分に認識したうえで、被害者、加害者の視点から解放された東・東南アジア共通の戦争認識を考える必要があるだろう。

日本の若い世代にとって、アジア太平洋戦争を具体的にイメージすることは、それほど簡単ではない。祖父母などの体験を、時代の違いととらえ、自分たちとは無縁であると感じている。しかし、若い世代と同じ年ごろの体験としてとらえることによって、より身近な問題となる。沖縄での平和学習で、女子高生がもっとも身近に感じるものとして、ひめゆり学徒隊の体験談をあげるのも、自分たちの学校生活とダブらせるからだろう。本稿で取りあげたアテネオ・デ・マニラ大学の学生の感想文も、日本人学生にとって同じ年齢で、具体的な交流相手のものであると考えると、より真剣にとらえる必要があることがわかってくるだろう。交流はあっても面と向かって戦争のことを話すことはなく、フィリピン人のバディーにショックを与えた日本人学生が、自分の無知が反日の底流になることを意識することもないだろう。日本人を戦争の加害者だと認識している東・東南アジアの若者の対日観を知ることが、交流を深めるために不可欠である。

引用文献

- アテネオ・デ・マニラ大学ホームページ <http://www.admu.edu.ph/> 2011年2月28日参照 .
- 早瀬晋三（2007）,『戦争の記憶を歩く 東南アジアのいま』, 岩波書店 .
- 早瀬晋三（2007年3月9日）, 紀伊國屋書店「書評空間」.
- 早瀬晋三（2008）,『未来と対話する歴史』法政大学出版局 .
- Hayase, S. (2010) *A Walk Through War Memories in Southeast Asia*, Quezon City: New Day Publishers.
- Syjuco, Ma. Felisa A. (1988) *The Kempei Tai in the Philippines: 1941-1945*, Quezon City: New Day Publishers.